

紆余曲折の末に たどり着いた都会の畑。

札幌市「かわいふあ〜む」 川合浩平さん

ワークシャツに肩まで伸びた髪、オレンジのキャップもイカしてる。どこか都会的な雰囲気をもとう川合浩平さんにマイクを向けたのは、札幌市西区の小別沢地区だった。

見聞を広げる中で自分が進みたい農の道を探ろうとした川合さんだったが、実際は多くの人の話を聞くほど、頭の中は「迷いとブレ」に満ちていった。

川合さんは38歳。出身は札幌だが、大学卒業後は東京で販促物制作の仕事などに就いた。その際に関わった百貨店の物産展で、北海道の農産物の存在に強く心を動かされたという。札幌に戻りサラリーマンを続けるも、農への思いは募るばかり。

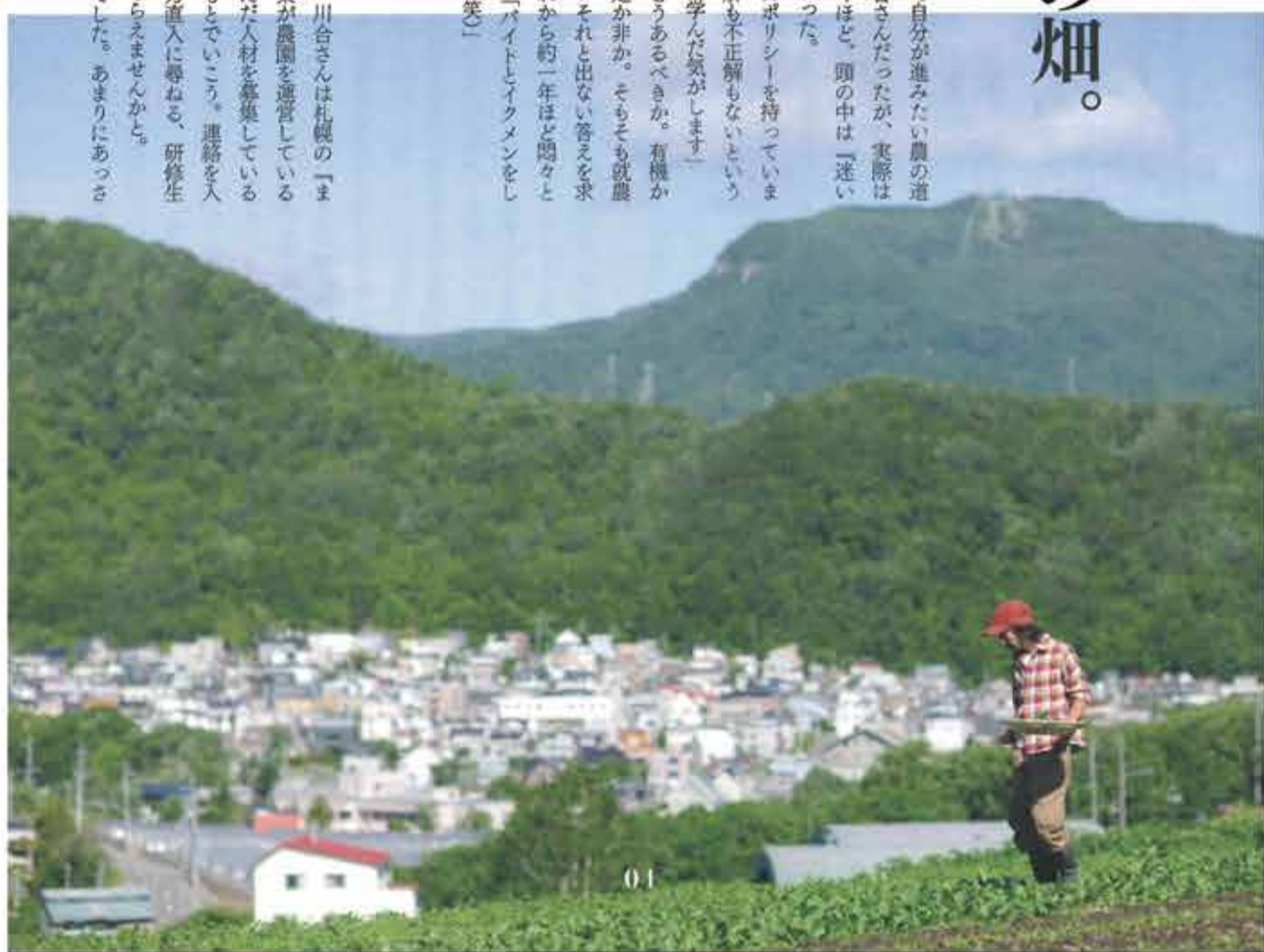
「誰もが自分の農にポリシーを持っていましたから。農に正解も不正解もないということこそ初めて学んだ気がします」

「結婚して子どもが生まれ、食の安全への関心が高まったことにも背中を押されました」

小別沢の農園で学んだ理想の農

思い立って足を運んだのは農業講座。圃場での実習と講義を行う専修コースで経験を積むに連れ、川合さんの思いは新規就農へと大きく傾いた。

2014年の春、川合さんは札幌の「まほろば」という企業が農園を運営していることを耳にする。ただ人材を募集している気配はない。ダメもとでいこう。連絡を入れた川合さんは単刀直入に尋ねる、研修生として受け入れてもらえませんか。



かわいふあ〜む
札幌市中央区南10条西9丁目
(畑は札幌市西区小別沢)
☎かわいふあ〜む

子どものことを考えると
新農園の有機栽培は
迷わなかったと川合さん。
そんな子煩悩な一面も彼の魅力だ。

り言われて拍子抜けしたくらい」
同社の農場は札幌市西区小別沢にあった。2haほどの広さだったが、幸運にもその畑は一年間の時間を経て描いた川合さんの農の条件の多くを満たしていた。

「まずは有機栽培で無農薬であること。肥料は有機認証を得ているものだけ、経験が積める少量多品目栽培というのも好条件でした」

実際の研修も川合さんを100%満足させてくれるものだった。播種機やタイミンから栽培のコツ、さらに札幌という商圏を見据えての販売や経営のノウハウまで、川合さんが求めていた「農のすべて」がそこにあった。

「中でも一番驚いたのは、無農薬で虫食いのないキャベツができることでした」
市民講座でつくったキャベツを思い起こした。無農薬を実践するのは簡単だが、素人栽培だと虫食いだらけの代物になる。当然商品価値などない。

「でもそこは無農薬と商品価値がしっかりと両立していたんです。ここなら学ぶことが多いと直感しました」それから二年間、川合さんは研修生として身を粉にして働いた。

思い悩んだ日々の先にあつた初めての収穫

2016年春、川合さんは念願の就農を果たす。新規就農者が最も苦勞する土地探

しは、まほろばの社長のこの一言で解決した。

「この小別沢の農地の半分を、彼に任せようと思っています」
札幌中心部が目前という、恵まれた立地の半分を新米農家に託すという代表の決断。それを促したのは、研修で垣間見た川合さんの実直な姿勢だ。企業の利益を差し置いても、この青年がこの先どのような農に挑戦するのか、どんな人たちとつながりを紡いでいくのか、その行く末を見てみたいと社長は考えたのだろう。地主との交渉までしてくれたのも、彼を応援したいからの一心に違いない。

「いい野菜を作り続けることで、このご恩に報いていかなければと思っています」
研修を踏襲しながらも「肥料をより少なく」「さらに多品目で」という独創性を加えて川合さんの就農はスタートした。スタッフは自分ひとり。二本の手でどこまでできるのか、1haの限界はどの辺りなのかを探ってみたかった。

そして6月。初夏の風が畑を渡る中、川合さんは初めての収穫を迎える。真っ先に刈り取ったのはほうれん草だった。

「最初のひと束を手にした時ちよつとジーンとしました。これで自分も農家の仲間入りできたんだなって」市民講座に通った日、先輩農家を訪ねた日、役場に相談した日。思い悩んだ日々が脳裏をめぐる。あの紆余曲



畑に消費者を招きたい。
札幌の生産者のネットワークをつくりたい。
川合さんの夢は広がるばかりだ。

折は、この初めての収穫の日へとつながる布石だったのだ。
ほうれん草に続きキャベツ、レタス、大根、サボイキャベツなど、25品目もの野菜が次々に収穫期に入った。それを収穫し軽トラに積みこむ。納品先は研修企業が経営する自然食材の販売店。ありがたいことに、川合さんがつくった野菜の評判は上々だという。
「今年は無我夢中の一年。一人の作業の限界も見えました。勝負は来年。札幌という地の利を活かし、この畑にお客様を招く仕組みを考えてみたいなど」
キャベツの下の種が輝く。なるほど、このおしゃれな新米農家はすでに二年目の収穫も見据えているのだ。